

< 2018年 7月 >

古賀 順子

「シモーヌ・ヴェイユ」

7月5日、真夏の太陽のもと、シモーヌ・ヴェイユ(1927-2017)の亡骸がパリ5区パンテオンに移された。昨年6月30日89歳で他界し、マクロン大統領の意向により、夫アントワーヌ・ヴェイユ(1926-2013)とともにパンテオン入りしたのである。

507年、カトリックに改宗したクロヴィス王が、この地に大聖堂を築き、512年にはパリを護ったジュヌヴィエーヴが埋葬された。18世紀に入り、大病から治癒したルイ15世は、聖ジュヌヴィエーヴのご加護のお陰であるとし、ローマのサン・ピエトロ大聖堂に匹敵する建造を建築家スフロに命じた。その後、1855年ヴィクトル・ユーゴーの葬儀を機に、フランス共和国に尽くした偉人を讃える象徴的な建造物として今日に至っている。

パンテオンの地下には、ヴォルテール、ヴィクトル・ユーゴー、キュリー夫妻らが眠っており、ヴェイユ夫妻はアンドレ・マルローとジャン・ムランと向かい合う部屋で永眠している。1974年ジスカール・デスタン大統領から保険大臣に任命されたシモーヌ・ヴェイユは、ヨーロッパ議会委員長も務めた女性政治家で、現代のフランス女性に残した功績は極めて大きい。

シモーヌ・ヴェイユ(旧姓ジャコブ)は、1927年ニースのユダヤ人家族の4人兄弟の末娘に生まれた。1944年4月13日未明、ドイツ軍に捕らえられ、家畜運搬用の列車で母と2人の姉とともにアウシュビッツ収容所に送られた。当時16歳(未成年者)であったが、18歳と偽りガス室から逃れ、強制労働に付いた。ソビエト軍の進行を怖れたドイツ軍は、アウシュビッツに収容していたユダヤ人のうち4万を集めて、深夜凍える雪道を70km歩かせ、辿り着いた者だけをベルゲンベルセン収容所行きの列車に乗せた。シモーヌの母親は、ベルゲンベルセンでチフスで亡くなり、父親と兄は収容所で亡くなった。冷たい雪道を回想し、「とても

寒かった。美しいという感情は稀であったが、凍り付いた木々を見て美しいと思った。」と書き残している。そして、アウシュビッツで過ごした日々が彼女の生涯を左右した。終戦を迎え、虐殺から逃れたユダヤ人は、腕の刺青を消して収容所の記憶を消そうとする人もいた。シモーヌの場合は、左腕の「78651」(刺青)と向かい合う。20世紀最大の悲劇を生きた彼女の生に対する思いはどんなに強いものであった想像することができる。憎しみ、恨み、復讐などの負からは決して人の幸福は見出せないことを生涯を通じて示した。収容所から生きて帰還したシモーヌは、法律、政治学を学び、高級官僚として司法の職に付く。

1974年保健省大臣に任命されたシモーヌ・ヴェイユは、翌年1975年「妊娠中絶法」を国会で通した。カトリック国であるフランスでは特に、理由がどうあれ妊娠中絶は法律で禁じられていた時代である。現実的には、国外や秘密裡のうちの中絶が行われ、命を落とす例もあった。性的暴行を受けた未成年女子の妊娠中絶を支持する社会全体の動きや女性たちの声をシモーヌ・ヴェイユが矢面に立って法律改正を進めたのである。彼女の名前をとって「ヴェイユ法」と呼ばれている。

パンテオンでの式典が執り行われた7月5日、偶然にも、同じくユダヤ人でフランス人映画監督クロード・ランズマン(1925-2018)が亡くなった。1985年『シヨア(Shoah)』を撮った監督である。第二次世界大戦下で行われたナチスによるユダヤ人虐殺をインタビュー形式で捉えている。10時間に及ぶ大作(566分)だ。日本上演に際して来日したランズマン監督の講演を思い出した。極めて深刻で重い歴史であるが、神話、伝説化をせずに、事実を事実として伝えていきたいという監督に、人や物事を批判する精神と人や生への強い愛着を持った人と感じたことを今も覚えている。

フランスでも日本でも、20世紀の悲惨な戦争を生きた世代の人々がいなくなりつつある。彼らの歴史や記憶を忘れずに先の世代に伝えていくことは、平和な時代に生きている私たちの義務ではないだろうか。